

がっ こう よし ひろ
月 光 善 弘

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 75 号
学位授与年月日 平成5年2月4日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 東北の一山組織の研究

論文審査委員 (主査)

教授 華園 聰 磨 教授 塚本 啓 祥
教授 杉山 晃 一

論文内容の要旨

序

近世において2,812石余の御朱印高を頂戴していた瑞宝山慈恩寺史料の中に、「一山寺院」という表記がある。これは、中心寺院を核とした組織の存在を示唆する。寺院の構成、堂塔伽藍の種類や配置、支配系統と役職の内容・年間の法会や行事などについて解明し、これに基づいて密教系の寺社に限定して研究対象を広げた結果、東北の密教系寺社の成立、密教の東北への伝播・浸透などを明らかにすることができると思われた。

一山寺院の組織には密教各宗派の法会・儀式の流れと教学的な体系が存在するが、主体をなす衆徒には清僧と妻帯の2種がある。時代を下るに従って入峯修行によって位階が昇進する修験道の行者である妻帯の衆徒や社僧の活躍が大きな存在として浮上してくる。中世から近世にかけて、東北における密教系の寺院、神社が社会的に機能してきたのは、妻帯の衆徒や社僧の存在を抜きにしては考えられない。これら聖職者の活躍は中世に活発化し、民衆とのつながりが強まり、戦国期から近世にかけて民衆へも積極的に働きかけ、民間信仰の形成と寺社の発展に寄与したものと考えられる。

東北の密教系の諸寺院の調査を行なった結果、神仏習合思想が主流となり、寺院ばかりでなく神社も含まれることがわかったので、「一山組織」と改めた。宮社であってもその神社の支配は、明治の神仏分離令で寺院と神社が区別されるまで、社僧といわれる僧侶が行っていたのである。

比叡山を開いた最澄と高野山を開創した空海は、神仏習合の思想をとり入れ東北の寺院、宮社もその影響を受け、明治の神仏分離令までその思想を継承した。しかし、徳川幕府の宗教政策で本末関係を確立させられるまでは、地域的に個別分散して一山を形成した「一山不俱」として存在したのである。

東北地方の諸寺社では、6人を単位とする六口供僧の役職が設けられたが、この役務は、密教の一座行法の六種供養として定着している六波羅蜜の修行を法会や儀式に取り入れ、より具現化したものと考えられる。

本論文は、相異なる多様な神格の宮社と、さまざまな宗派の仏教寺院とが一山組織を構成し、それが地方文化の核となり人々の精神的支柱ともなっていたことを明らかにし、平安仏教（密教）が中世・近世の長い年月、広汎な郷村社会に受容されるためには、確たる組織・機構（一山組織）が不可欠であったとの見解に立ち、中世以降、近現代に及ぶ一山組織の歴史的な展開や変遷を考察する。一山組織はまた、修験道や陰陽道とも密接な関係を持っている。これらを包摂して一山組織の基盤を拡大強化する局面も重視する。

こうした諸問題を仏教史（特に密教史）・神仏習合史・文化人類学の3つの視点から史料に基づいて考察し、一山組織を全体的な視野に立って把握し、特にその組織・構成や社会的な宗教機能を究明することが本論文の意図するところである。

第1章 序 論

本章では、東北の一山組織を考える前提として仏教、特に平安初期に成立し全国に伝播する密教の展開を中心に、神仏習合思想・本地垂迹思想や修験道との関係で述べる。さらに近年、特に注目されてきている中世寺院史の研究をふまえて、寺院組織について検討を加え、高野山・比叡山さらに吉野山・英彦山などの地方霊山・修験道諸山の一山組織を考察する。

律令体制の再建と仏教の刷新を目指して、延暦13年（794）平安遷都が行なわれ、この時期に抬頭したのが山林修行の経歴をもつ最澄と空海であり、ともに中国に渡り天台・真言の両宗を伝え、学派的な南都（奈良）仏教に対して実践性の強い宗派の仏教を推進した。かれらは比叡山寺・高野山寺を修行の道場とし、実践性の強い密教の伝道を活潑に行なった。そして、これらを基盤とした地方霊山・山岳寺院・神宮寺などを通じて、密教が地方へ伝播する。密教は神仏習合（本地垂迹）思想を発展させ、わが国古来の山岳信仰を吸収しながら儒教・道教を習合し、日本独自の修験道を形成し、全国津々浦々にまで浸透した。

次に東北地方への密教伝播を見ると、開基伝説によれば、古代における東北の仏教は徳一菩薩による法相宗と、慈覚大師による天台（密教）の伝播が注目される。さらに最初は天台（密教）であったが、真言密教に転派する寺院が多いようで、東北仏教の発展の背景には、密教ならびに修験道の伝播・浸透が中核をなしているものと考えられる。平安中期以降、天台・真言の密教を中心とした修験道の地方進出により、東北各地の霊山・大寺はその影響下におかれ、修験道を組織の中に組み

込んで、一山組織ならびに山岳寺院が形成される。藤原三代の「平泉文化」も密教（修験道を含む）を中心とした仏教文化であったといえるのではなかろうか。

古代から中世にかけての白山・葉山・熊野・八幡などの信仰は、修験者たちによって齋もたらされたものである。鎌倉新仏教各宗の中で特に曹洞宗の寺院が数多く見られるが、これらの中には密教（修験）寺院からの転宗もかなりみられる。このように古代・中世の東北仏教を考える上で忘れてならないものに、修験道の展開があり、代表的なものとして出羽三山、すなわち羽黒修験があげられる。そのほか東北地方の山岳寺院には、妻帯衆徒や補佐役の修験者が居住し、霊山を形成して入峯修行に精進していたのである。

近世になると徳川幕府の宗教政策により、自由な山岳抖擻が難かしくなり、衆徒や修験者も一定の住居を構えて、霊地・霊山への登拝者などの先達を務めるようになる。

さらに東北の仏教の展開を密教の信仰的側面を中心に振り返り、著者の基本的な立場と東北の一山組織の特徴を概観しておきたい。こうした作業を通じて、東北の一山組織研究の視点や課題を示すとともに、その信仰がより明確に提起できるものと思われる。

以上、東北の平安以降の仏教は、密教と修験道の大きな影響をうけ、各地の霊山や山岳寺院・宮社を中心に一山組織を形成し、加持祈祷（現世利益）の宗教機能を務めてきた。こうした東北の一山組織は「一山不俱」といわれ、別山・無本寺の山として、中世までは他山の支配を受けることがなく、諸山がそれぞれの特色を有していた。しかし密教寺院であるかぎり、組織や法会などに共通の特色が見られ、それらをまとめると11か条となる。それで著者は、「一山組織とは、加持祈祷を主とする密教系の寺院坊—または社僧（六口供僧）—によって構成され、檀那の除災招福を祈念する祈願寺的性格を有する寺院および神社である」という作業仮説的規定を導き出したのである。

第2章 山形県の一山組織

第1章で述べたように、一山組織は大寺院をはじめ宮社、霊山にも形成されていった。本章では、山形県に成立していた一山組織を持つ寺院・宮社・霊山の歴史の変遷を含めて検討する。

第1節 慈恩寺の一山組織

慈恩寺一山は明治維新に寺領上地を命ぜられるまで、東北地方の一山組織の中でも御朱印高2,812石余を頂戴し、支配職・衆徒・補佐役・雑務役など、他の一山組織より数が多いばかりでなく、組織内容も複雑になっていた。すなわち支配職3か院のうち学頭2か院が、清僧寺として法会の大導師をつとめ、妻帯の別当より上席であったこと。次に衆徒の場合は、清僧の数がかなり多く、通常は妻帯修験の上席で、修行過程も異なっていたと考えられる点など興味深い。また補佐役についても、慈恩寺の一山組織で独特と思われる承仕役の寺司とその下役などをはじめとして、舞楽の指南に当たった舞兵エの林家や「舞童帳」のここと、一山役所・役人（寺領代官とその下役人）・与力・月蔵・山守・鹿嶋院などの補佐役という役割について、再考しなければならないことを痛感させら

れた。さらに雑務役としての同宿・念仏寺・家来・仲間・寺百姓など不明確な問題も多いが、一山寺院の研究を進めて行く上で重要な手がかりが与えられた。

第2節 宮内熊野神社の一山組織

現在の南陽市宮内熊野大社は、明治の神仏分離まで一山組織を形成していたことを、関係の文書により知ることができる。しかし、勧請年代については伝説だけで資料がなく、保護者についても、長井の庄の地頭を勤めた長井氏（大江家）以前については詳細が明らかでない。

組織の書き上げで最も古いものは、伊達政宗（儀山）代の元中2年（1384）から応永12年（1405）までの間に書かれた一山坊中の「覚書」である。神主を含めて21坊が存在したが、その後、減少し、近世の間は六供衆と呼ばれる6人の社僧と社人（神官）が、一山組織の主体をなしていた。明治の神仏分離で熊野一山は神社（大社）となり、学頭代の台林院は復飾して神官となり、宝積坊が真言宗所属の寺院となったほかはそれぞれ還俗した。

第3節 平塩熊野神社の一山組織

本節で検討する寒河江市平塩の熊野神社は、明治8年の『地誌編輯取調帳』に「社老戸郷社老座」と記された郷社であった。本社は紀州の熊野三社を勧請したもので、熊野権現を祀り熊野神社と称し、東は高屋村（現寒河江市大字高屋）、西は伏熊村（現西村山郡大江町字伏熊）、南は北目村（現東村山郡山辺町大字北垣）の3か村に分霊を祀り、現在はそれぞれ鎮守となっているが、戦前までは村社であった。このように平塩と高屋・伏熊・北目3か村の熊野神社は、もとは本社と分社の関係にあったのである。

寒河江市平塩の熊野神社も、現存する諸資料から考察すると、勧請年代は前九年および後三年の役ごろが浮び上ってくる。その後、中世に入って鎌倉時代になると、寒河江荘を与えられた大江家の保護を受ける。天正12年（1584）大江家が斯波氏の後裔である最上義光に滅ぼされてからは最上領となり、それまで一山の学頭職を勤めていた如法堂の社僧が、後に平塩寺と称して別当職となり、社僧以下が配分を受けていた社領高149石9斗余と山林80町歩を拝領した。元和8年最上家改易後は、徳川幕府の直轄領となって従来通りの社領を有し、明治維新の神仏分離まで継続する。神仏分離に際し一山惣衆がことごとく神道に帰したので、新たに葬祭を担当する平塩寺が発足し現在に至っている。

第4節 谷地八幡神社の一山組織

本節では、「河北町誌編纂資料編」の第51輯『寺社文書資料集』（以下『資料集』）に記載されている史料を中心に、谷地の八幡神社の一山組織を明らかにした。

河北町谷地の八幡神社は、古来から寒河江・溝延の八幡神社とともに、寒河江荘を代表する八幡神社の一社として、谷地周辺地域での信仰の中心的な存在であった。この八幡神社は天正12年

(1584) 以前に、白鳥十郎長久が白鳥村の宮ノ下に奉祀されていたのを内楯に遷宮した。その時、別当円福寺や守役善住院、修験の知光院などが、同時に移って来たと伝えられている。谷地の八幡神社の前身である白鳥村の八幡神社は、源義家が後三年の役に清原武衡と家衡を誅伐し、所願成就の応礼として寛治5年(1091)に勧請建立したと伝えられている。

同社の一山組織は、支配職が別当の幡谷山無量寿院円福寺で、慶安2年(1649)に八幡社領17石6斗余と社域内の竹木諸役免除の朱印地を拝領し、寛文12年(1672)の寺格は院室談林(常法談林所)で、延宝3年(1675)には仁和寺の直末寺になった。寛延3年(1750)の覚によれば、円福寺の開基は日範上人だが年号は不明である。中興の祖は宥栄法印で貞享元年(1684)3月28日と記されている。このことは天保9年(1838)の「寺柄書上」にも同じように記されている。したがって第24世の宥栄法印時代に興隆したと思われる。

次に社僧として、末寺1か寺と門徒6か寺の計7か寺の寺・院・坊名がある。享保6年(1721)9月20日の「八幡宮領寒河江領御朱印高並人数帳」の「門末の覚」が最初であり、明治の神仏分離まで変らない。これらの門末7か寺が整えられるのは、中興の祖とされる宥栄法印の代ではなかろうか。また補佐役としては社人三家と楽人三家であるが、社人三家の中に八幡社守役としての善住院と社人兼楽人としての舞楽の林家(現在は神主)など、笛役・太鼓役がいて六供に住んでいた。次に雑務役の門前衆は、天保4年(1833)には11戸であり、この雑務役の人達も門前の六供に居住していたと思われる。

第5節 葉山の一山組織

『三代実録』の貞観13年(870)8月28日の項に「出羽国白磐神。須波神並従五位下」と記されている白磐神が、白岩郷にある葉山の神にあたるといわれるが確証はなく、今後検討の余地がある。羽州村山の葉山は出羽三山との関連が深く、江戸時代には羽黒山・月山・湯殿山を「出羽三山」と呼び、それ以前には羽黒山・月山・鳥海山をもって三山とし、さらに古くは羽黒山・月山・葉山を三山と称して入峰修行の行場としていたといわれ、葉山の開創はかなり古いものと推察される。

一般に羽州の葉山は白磐神であると認識されているが検討の余地がある。葉山すなわち端山は、仏教、特に密教との関連で山岳信仰に組み入れられ、霊峰月山の端山としてまた名利慈恩寺の前建として、崇敬せられるようになったのである。そして大友義助氏の『羽州葉山信仰の考察』、中里松蔵著『葉山の歴史』、『大円院古文書』(仮称)などによれば、筆者が作業仮説として設定した一山組織に該当する。しかし葉山がいつ頃、誰によって開山されたのか、また一山組織をいつ確立したのかの点になると明確ではない。慈恩寺と寒河江荘の大江家との関係を重視すれば、修験道の隆盛期である鎌倉初期に臨済宗の開祖である栄西禅師(葉上僧正)の弟子達が、長井荘の資福寺と関連して葉山を中心に中興開山したと推察される。

諸資料によれば葉山の一山は、別当明実(舜誉)の出現によって伽藍堂社・仏像・法具などが整備された。舜誉は「古縁起校定」の末尾に、「葉山三山主中興」と記し、また「年要記」にも、延

宝3年(1675)から葉山院主・執行別当と学頭などの要職を兼務して、名実ともに葉山を中興した名僧というべき人物である。万治元年(1658)、葉山一山には衆徒12坊が存在したが、これがいつ頃から形成されたかは不明であり、衆徒については種々の変遷が見られる。しかし葉山信仰が東北の南半部、特に山形をはじめ岩手・宮城・福島などの各県に深さと広がりをもたせるのは、葉山一山の衆徒と補佐役としての末派修験の活躍に負うところが大きい。また、葉山一山の門前である畑村(畑在家8軒)は、葉山信仰との関連によって形成され、不離一体となって盛衰をともにしてきたのである。

以上、葉山一山の隆盛は住職舜嘗の時代に頂点に達し、その余力でしばらくの間は維持されたが、近世の中頃から次第に勢力を失い、わずかに命脈を保ちながら近世末期へと推移した。しかし、明治維新の神仏分離や寺領の召し上げにより決定的な打撃を受け、一山は衰退するに至った。

第6節 鳥海山の一山組織

戸川安章氏は鳥海山の調査研究にたずさわった人として阿部正巳・松本良一・岸本英夫・鈴木昭英の諸氏をあげている。このように鳥海山(大物忌神)については、多くの人がいろいろな角度から調査し、記述を試みているが、本節では『遊佐町史資料』(第1号)『鳥海山資料』、姉崎岩蔵著『鳥海山史』、池田昭二著『鳥海山』などを参考にしながら、鳥海山の登拝口に形成された一山組織をまとめてみようと思う。

鳥海山と呼ばれる以前、この山は大物忌神として、月山神とともに出羽国の大社として、承和5年(838)に位階・勲等が授けられ、同7年には、神封2戸が与えられている。貞観6年(864)には月山神と位階が同じになり、勲等は上位となった。これは蝦夷の反乱を予知せしめる大物忌神の噴火によるもので、元慶2年(878)には、月山神とともに神封2戸が加封された。仁和元年(885)はじめて神宮寺の名が見られ、『延喜式』には月山と大物忌神の神祭料2,000束、神宮寺料1,000束と書き上げられている。

次に、鳥海山山麓に形成された一山組織は、表口(山形県側)に吹浦口・蕨岡口・劔社口の3つがあり、裏口(秋田県側)に矢島口・院内口の2つがある。これらの中で最も古いのは吹浦口であるが、近世の初め頃から最大の勢力をもつようになったのは蕨岡口である。これは保護者である最上義光との関連が考えられる。矢島口と院内口に形成された一山組織の衆徒の中に、内六驅・外六驅・又六驅と、内六供・外六供で構成される組織が存在した。これらの組織構成を考えると、一山組織の主体をなす衆徒の数は六口供僧(第6章の第2～3節参照)が基盤となり、6の倍数になっていたと考えられる。六口供僧の役務内容は、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜を象徴する6種供養を神仏に供えることであったと推定される。

第6章 宮城県・岩手県の一山組織

一山組織の成立には、密教の伝播や修験道の展開と密接な関係があったと考えられる。本章では

こうした密教の伝播とともに発展してきた宮城県・岩手県の一山組織を取り上げる。

第1節 勝大寺の一山組織

本節では『宮城県史』に記載されている『楽峰山菩提院勝大寺書出』（以下『書出』）に、「永承2年8月10日二王堂建立棟札写ヲ以左ニ御書上仕候事」とあり、永承2年（1047）8月10日の「楽峰山菩提院勝大寺二王堂の建立時の棟札写」（以下「棟札写」）の表面に、当時の院主は実乗坊の快舜律師であり、仏師賢等が願主で勸進し、二王堂を修造したと記されている。その裏面には院主ほか16坊の衆徒、そのほか8坊と法橋行善の名が書き上げられている。この一山の組織を明らかにすることにより、東北地方への密教伝播について的一端を理解することができると思われる。

勝大寺は一山の本堂である観音堂を中心に一山組織が形成され、『書出』には永承年間までは26坊が存在した。その後、12坊は退転して14坊となったことが記述され、『棟札写』の裏に院主をはじめとする26坊名が書き上げられているので、永承2年には衆徒26坊で構成された一山寺院があったことがわかる。勝大寺一山の主体をなす衆徒の存続した14坊のうち、10坊が清僧衆徒で、残りの4坊が妻帯衆徒であったが、建久元年（1190）以降、衆徒は全部妻帯となったようである。補佐役である承仕は『書出』には2人とあり、それらの歴代の法名と実名について書き上げられている。古い方が室町末期であり、承仕2人となるのは宝永年間（1704～10）以後のことで、江戸中期からのことである。雑務役（門前衆）については、今後調査を進め、さらに充実した内容のものにまとめたい。

第2節 笹峰寺の一山組織

伊東信雄氏が述べているように、天平21年（749）に産金して東大寺の大仏鍍金料を献上し、聖武天皇はこの産金で喜びを国民に宣命をもって告げ、「改_ニ天平廿一年_ヲ為_ス天平感宝_ト」としたように、国家的に重要な土地となり、黄金山神社は式内社の一つとして、律令制国家時代には国家の奉幣にあずかっていた由緒深き神社である。したがって黄金迫、黄金山神社を含む笹嶽山一帯の地は、8世紀中葉頃から世人の注目をひくようになった山である。また、笹峰寺の西北方約7キロにある加護坊山は、修験者の入峰修行の道場として早くから開かれ、笹峰寺開創とも密接な関係がある。

開創以来、近世末期まで、大檀那である武家の戦勝祈願や武運長久を祈り、領主から寺領を拝領してきた笹峰寺一山は、明治維新に寺領召し上げとなるが、一山全部が比叡山直末寺となり、神仏分離に際しても鎮守の白山宮が従来通り一山衆徒の手によって引き継がれ、古代そのままの座による祭祀を伝えることが可能となった。東北の一山組織の中では、唯一、座祭祀を究明できる貴重な存在である。

第3節 陸奥国分寺の一山組織

昭和30年から34年まで5か年にわたって行なわれた陸奥国分寺跡の発掘調査の結果、日本の国分

寺の研究上、かつて見られなかったほどの成果をあげ、その詳細は、『陸奥国分寺跡』として出版されている。

本節では、陸奥国分寺・国分尼寺を、前述の『陸奥国分寺跡』、陸奥国分寺の「年中行事手引」、「御祭礼頭人方手控写」、「御祭礼御祈禱饗応規式手鑑」を中心に「近世以降における陸奥国分寺関係記録書」（表21）などを参考にして、陸奥国分寺一山の組織と変遷について考察する。

陸奥国分寺一山の組織は、支配職・衆徒・補佐役の惣衆以外の人びとに相当する雑務役で構成されていた。支配職は学頭・別当・院主の3か寺で、寺禄は同じでも寺格は異なっていた。すなわち別当と院主は学頭より一段下位の寺格となっている。衆徒が昔48坊存在した時は妻帯であったが、24坊に減少してからは清僧となったことが記されており、席順が戒藹で定められるのは他の一山組織と同じである。役務で輪番制の年預・頭人という特別職の寺役の資料では、一山の年中行事と組織的活動の実態、経済的な動向が注目される。補佐役としては承仕、満蔵院・勢太夫・蔵人・二王堂・笛吹・鼓太打の茂助などがあげられる。以上が惣衆と呼ばれる人々で、雑務役（門前衆）には扱箱衆・射手衆・勝手衆・御奉行衆・若男・鉾持・光善院などがあげられる。

第4節 中尊寺の一山組織

大塚徳郎氏は「平泉を中心とする古代東北の交通路」の中で、中尊寺一山が旧奥州街道の要地に建立されたことを述べている。「建武元年八月日大衆訴状」によれば、天喜康平の頃（1053～64）、すなわち前九年の役で源頼義・義家父子が安倍頼時・貞任・宗任父子を追討する時に、衣関山の月見坂で、白山、山王社を奉拝して戦勝を祈願した。祈願が成就したのでまかじり・小前沢の両村を社領として寄進し、白山・山王社を一山の鎮守社として祀ったことが記されている。

このように白山・山王を鎮守社とした関山の地に、陸奥守として陸奥・出羽両国を領有した初代清衡が大檀那となり、長治2年（1105）から天治3年（1126）に至る22年の間に絢爛たる堂塔伽藍を整備したもので、天治3年3月24日に落慶供養の大法要が営まれた。この時、奉納された清衡の供養願文によれば、中尊寺建立の意図は、鎮護国家・領内安穩を祈念するとともに衆生済度によって清衡自身が、死後は安楽の浄土に往生することを念願したものである。天治3年からおよそ860有余年を経過しているが、本節では、こうした中尊寺の一山組織と変遷を明らかにする。

藤原清衡が大檀那となって奥州では未曾有の壮麗な堂伽藍を建立し、鳥羽法皇の御願寺として勅使の下向を仰ぎ、天治3年3月24日、荘厳な落慶供養の大法要を厳修した。当時の一山組織について知ることができないが、『吾妻鏡』に寺塔40余宇、禅坊300余宇と記されているので、これらの坊舎が創建当初に存在したと推察される。しかし、大檀那である平泉の藤原氏の衰亡とともに、中尊寺一山も急速に崩壊した。中世の初には頼朝の保護を受けたが、相次ぐ兵火で一山の堂伽藍や院坊の多くが焼亡し、近世初期に至るまで荒廃の一途を辿った。「元禄九年書上写」によれば、堂伽藍後の大半が畑・竹林や野原となっている。

その後、伊達家の歴代領主の保護によって、小規模ながらも漸次復興され、組織の上でも別当代

の金色院や衆徒16坊・修験1か院・承仕1人に再編されて明治を迎えた。神仏分離に際しては、一山鎮守であった白山宮は村社になり、神職や氏子によって管理されるようになるが、祭祀は従来通り古式に則って行なわれ、能舞も一山衆徒を主とする能組によって奉納され、今日に至っている。

以上が中尊寺一山の組織と変遷である。組織の面で興味深いのは別当職である。これは鎌倉の初め頃から設けられたが、比叡山の一山大衆組織の持法師に相当するものではないかと思われる。そして、実際に中尊寺の一山衆徒を支配していたのは、清僧衆徒で経蔵別当の大長寿院だったのでなかろうか。また一山衆徒のほとんどは創立当初から妻帯衆徒であったと推察される。

第5節 毛越寺の一山組織

平泉の仏教を中心とした平泉文化は、中尊寺一山と毛越寺一山を中心に展開していった。前者の組織と変遷については前節で述べたので、本節では毛越寺一山の組織構造と歴史の変遷をみることにする。

毛越寺一山の開創期と考えられる平安末期から鎌倉、室町の中世にかけての資料がほとんどない。近世以降の組織機構を中尊寺と比較すると、18か寺で構成され本山が同じでありながら、一山の運営を司どる支配職に関して相違が見られる。毛越寺一山が天台系寺院として江戸上野の東叡山輪王寺の末寺に加えられるのは、中尊寺と同じ寛文5年（1665）である。その後も真言宗の清僧が一山の支配的な座に就いており、これが原因で天台と真言の両宗をめぐる紛争を生みながらも、両宗兼帯のまま明治まで続いた。組織構成については、延宝4年（1676）に作成された「規則書」により、一山組織の根幹をなす衆徒の育成、戒勸、役務などに関して、近世の中頃から知ることができる。

毛越寺一山の主要伽藍である金堂に、円隆寺という寺号のついていることは珍しい。一山組織の立場から中尊寺と毛越寺の両寺を検討すると、毛越寺一山が開創される時には、すでに中尊寺一山は建立されていて、その境内に毛越寺の堂伽藍が建立され大泉池が造られた。また、山内の重要な伽藍であった嘉祥寺は、完成半ばにして基衡が亡くなったので、父の遺志を継いで秀衡がこれを完工した。さらに観自在王院と無量光院は、基衡の妻や秀衡が建立したのである。これらの建造物を総称して、毛越寺と呼んでいた。したがって毛越寺とは、藤原三代によって建造された一山寺院であるともいえるわけである。

次に毛越寺一山の神社・仏閣についていえば、一山の惣鎮守の摩多羅神が常行堂に祀られて中央惣社となっている。この常行堂で一山の主要な年中行事が執行され、これに民間信仰行事としての蘇民将来が結合している。また、一山の四方鎮守社であった祇園社・新熊野社は、明治の神仏分離以後に八坂神社・熊野三社と社名が変更された。これらの諸社の祭祀が、現在、民間の人びとの手で行なわれている。このことは、一山組織と民間信仰との関連という点で興味深い。

また、師檀関係では、一山の支配職の座に就任していた真言宗の清僧（隆蔵寺）が、天正2年（1574）の頃から数多くの滅罪檀家を有し、葬祭を行ってきた。ということは、一山組織としてばかりでなく、密教寺院の立場からしても稀有の例と思われるが、寺院経営の上では注目される。

さらに藤原三代が平泉に導入した仏教文化の特質は、中尊寺と毛越寺一山の四方鎮守・無量光院などの伽藍数と配置、建築の荘嚴などにより、藤原三代が異常なまでの熱意をもって、当時の都の平安京をはじめとする中央の文化を導入しようとした意図を推察し得るが、その中に東北地方としての地理的・人為的要因も加わって、中央の仏教文化とは異なった平泉文化を形成したものと思われる。

第6節 天台寺の一山組織

桂泉八葉山天台寺(図54)は、北上川の水源がある山嶺に栄えた山岳寺院で、平泉町の関山中尊寺弘台寿院の開創よりも1世紀前に創建されたと伝えられる古刹である。古代の倭国と蝦夷の国を分かち境界に根をはる特殊な存在であったとされる。したがって天台寺が、北奥の仏教史を解明するのに看過できない存在であることに注目しながら、天台寺の歴史と一山組織について考察する。

天台寺には信仰の原点ともいべき桂清水があり、古くから霊場として信仰をあつめていたと考えられる。それが10世紀頃に至って、大きな寺として整備されていったと推定されており、天台寺が霊地、霊場として地域の人びとの信仰をあつめるに至った歴史の深さが感じられる。

一山組織を形成して繁栄した天台寺は、明治維新の神仏分離令や寺領召し上げにより危機に遭遇した。別当桂寿院は明治4年(1871)7月に復飾願が許可され、桂寿院を桂寿司と変更した。また、天台寺は一時、桂泉神社という社名に変えられ、菩薩立像などの幾つかが廃仏で焼かれたと伝えられる。明治15年(1882)に桂寿院も火災になり、一切の仏像・仏具・古記録などを失い、再興できず60代で絶えた。

天台寺一山組織の崩壊は、明治維新の神仏分離令と土地令によって、経営基盤を失ったことにあるが、別当桂寿院の没落もまた大きな原因であった。これまで一山を運営してきた別当、衆徒体制の核が失われたために、衆徒の中にも退転坊があらわれ、一山組織の崩壊を決定的にしたものと考えられる。

第4章 一山組織の諸相

一山組織は、その歴史の変遷とともに、多様な信仰を内包し成立してきた。第2章・第3章で述べた寺社も含むが、本章では歴史の変遷や種々の民間信仰を扱う。

第1節 立石寺(山寺)の歴史の変遷

山形(羽州)の霊場としての山寺は、岩山寺として日本の三山寺の随一にあげられている。寺伝によれば、円仁(慈覚大師)が貞観2年(860)、阿所川院立石寺を建立したと伝えられるが開山を円仁にあてることについては疑問がある。しかし、開創の時に清和天皇から賜わったと伝えられる「立石倉印」、天養元年(1144)の「立石寺如法経所碑」、仁安2年(1167)の経筒の蓋など、立石寺一山の歴史の古いことを物語っている。

中世に入って鎌倉時代の立石寺は、幕府直轄の祈願寺だったので、支配職の院主・別当の両職は幕府が任命した。南北朝時代のはじめには、当地方では南朝の勢力が強かったが、足利尊氏の一族である斯波兼頼が出羽国の按察使となって山形に入部するようになると、次第に北朝の力が強くなった。斯波氏は立石寺の堂社を修補して厚く保護を加えた。室町朝の大永年間（1521～7）、立石寺一山は戦火のために焼失したが、当時の院主一相坊円海は最上氏一統の外護によって、一山の堂社を復興し中興の名僧と仰がれた。

慶長年間（1596～1614）になって、立石寺塔中の諸院坊で所有地を売却する者が多くなり、一山の塔中諸坊が経済的に困窮したと思われる。元和4年（1618）ならびに同8年、天海大僧正は立石寺再興の依頼状を送っている。その後、立石寺一山の寺領支配機構が確立していなかったために紛糾するが、文化10年の「議定覚」によって整備され、近世末期には法脈相統の寺に昇格した。

明治維新の神仏分離令や寺領上地、さらに同5年の山寺の大火などによって、一山の頹勢が重なるが、立石寺別当職66世の優田和尚は、この不運を克服し1000年余を経た羽州の名刹として法灯が輝いている。

第2節 慈恩寺開創と葉山信仰

第2章第1節では慈恩寺の一山組織を明らかにしたが、本節では『慈恩寺年代集記』などを中心に、慈恩寺開創をめぐる問題、修験道とくに葉山信仰との関係、慈恩寺と在家などについて考えてみたい。

『伽藍記』などで述べているように、葉山と慈恩寺は1つの峰であった。葉山修験者が坊舎を建てるに及んで、葉山は奥の院、慈恩寺はその前建となった。その後、慈恩寺は寒河江荘内に属していた関係上、撰関家の藤原氏と奥州平泉の藤原氏の寄進によって諸堂塔が造立され、葉山修験と分離して独立したのである。このように慈恩寺は開創以来、葉山の信仰と密接な関連があり、民間の信仰に直結し、一山を支える経済的な基盤は、在家（単なる百姓とは異なるところの俗侶）によって維持され、修験と在家とが緊密に結合していたと考えられる。

第3節 蔵王山の歴史と民間習俗

蔵王山とか蔵王岳というのは、この山に修験道独自の守護神である蔵王権現が祀られるようになってからであるが、いつ誰によって開山されたかについては明確でない。諸書に蔵王山は『延喜式』「神名帳」に書き上げられている苅田嶺神社であると記載されているが疑問が残る。苅田嶺神社は陸奥国の大社だったので陸奥国側を調べると、前述の願行寺の48坊の中3坊を除いて坊名さえも不明である。残存の3坊についても、山之坊願行寺は延宝年間に廃寺となっており、また蔵王権現の別当である嶽之坊（当時金峯山蔵王寺）は、貞享元年（1684）祐専法印の中興まで歴代住職名が不明である。さらに明和元年（1764）に再び無住となり、本寺である蓮蔵寺が監守を派遣して管理している。

これに対して願行寺の学頭であった聖光院宮本坊は、伊達政宗の代に200石の寺領を有し、宝池山聖光院宮本坊蓮蔵寺と称し、刈田一郡の鎮守である正一位白鳥大明神社（刈田嶺神社）の別当となり、末寺3か寺・末山20か寺を有する大寺院となって繁栄している。明治維新の神仏分離によって、蓮蔵寺の住職は蔵王権現社を蔵王神社とし、その別当になることを希望して、名刹蓮蔵寺が廃寺となった。その後、云識という傑僧が明治12年（1879）再興して今日に至っている。

次に蔵王山の民間習俗として、中世末頃より昭和20年以前までは現世利益の靈山としてとらえられ、参詣者も多かった。また、江戸時代は修験道の行者の行場として重視されたために、女人禁制の靈山であった。すなわち山形県側では6合目の「お清水」、宮城県側では「清水」といわれた冷泉堂（冷水堂）か、あるいは「賽の碓」より上は女性の登山が禁じられていた。『蔵王山調査報告書』を見ると、現在、刈田岳に祀られている刈田嶺神社には、蔵王講中によって寄進された駒狗が奉納されている。また、山形県立博物館主催の特別展の図録に「お蔵王の田植」と「おじや祭り」が記載されている。

第4節 勝大寺一山の年中行事

東北地方の一山組織の中でも古い資料を有する勝大寺一山の主なる年中行事についてみると、神仏分離前には、例大祭・月並講・追儺（鬼やらい）・福田などの行事が行なわれ、民間信仰の母体的役割を果たしてきた点では他の一山組織と変わりがない。しかし一山の最大の年中行事である例大祭の時に、一山の衆徒を中心として古伝の式五番が舞われるが、それらの舞に特色が見られる。

第一番は勝大寺一山の開創を、第二番は当山の本堂である観音堂を創建したと伝えられる征夷大将軍の坂上田村麻呂夫妻が東夷征討についての計略を、第三番は同夫妻が喜びの舞を舞ったのを表現したと伝えられる。第四番の「馬上渡し」は、源頼朝が平泉の藤原泰衡を討伐の後、所願成就の礼と軍労休息の間に、那須与一が八嶋壇の浦で扇的を射落すありさまを舞ったものである。第五番の「田楽（舞）」は、8人が花笠を各自の竹竿の先につけて傘鉾のように差上げ、五穀の豊穰を祈念して舞ったもので、農耕神としての白山（本地仏は十一面観音）の祭祀にふさわしい内容といえる。

要するにこの白山宮の例大祭の舞は、勝大寺一山の開創・歴史的変遷・大檀那との関係を示している。さらに農耕神としての白山（十一面観音）信仰に深い関連を有し、地域農民の五穀豊穰を祈念し、これらの行事に使用された道具を取得することが、豊作と関連するという信仰が見られることは注目すべき点である。

第5節 金華山開創と弁財天信仰

本節では、金華山の開創と弁財天信仰ならびに修験の関係などについて考察する。

聖なる島としての金華山がいつ頃、誰によって開かれたのか不明であるが、奥州平泉藤原三代秀衡の時には、大金寺以下48の寺院坊庵が建立され、寺社領1,000石を寄進されて一山組織を形成し

ていた。藤原氏の滅亡後は、鎌倉幕府から派遣された石巻城主、葛西三郎清重の領地となり、寺院数は18坊、寺社領は500石に減ぜられた。しかし葛西家の保護により金華山大金寺はその勢力を維持し、かなりの数の密教行者や修験者たちが、この島に出入りしたと考えられる。

次の南北朝や室町期になると、資料がほとんどないので不明であるが、天正年間より文禄2年まで（1573～93）の21年間に、真言宗金華山大金寺が験力のすぐれた成蔵坊長俊によって中興された。

近世の間は、豊漁・航海・授福の神として、また女人禁制・行者修行の道場として現世安穩・後生菩提を祈念する霊山として人びとの信仰を集めたのである。その要因の一つとして、金華山の弁財天を護持する聖職者たちが先達となって、弁財天信仰を説きながら、一般大衆の金華山信仰を促したことがあげられる。

明治元年の神仏分離以後の上地令や修験道廃止の中で、金華山大金寺は黄金山神社となり、僧侶も復飾して神官となった。現在でも広い地域におよぶ信者を有し、さらに多くの観光客で賑わっている。黄金山神社の行事、金華山に残る地名および習俗の中には、開創以来、伝承されている修験道も含めた密教の息吹が根強く感ぜられる。

第6節 陸前（宮城県）北部の密教系寺院と信仰習俗

本節では、黒潮と親潮が合流し、世界三大漁場の一つに数えられる三陸漁場の中心海域となっている陸前（宮城県）の北部の地域の村落生活と信仰習俗、密教系寺院との関係を、『奥羽観跡聞老志』上、『封内名蹟志』、『封内風土記』などを中心に、筆者の現地調査を加えてまててみた。

陸前北部地域の密教系寺院と村落生活との関係をみると、神社や仏堂にも変遷があり、それらの別当を務めていた密教寺院にもかなりの変遷がみられる。しかも近世・中世・古代と時代を遡るにつれて密教寺院も増加し、それらの寺坊には、多くの修験者が住んでいたと思われる。苦難にあうことの多いこの地域の村人たちにとっては、山野を、跋涉して修行を積み加持・祈祷を行なう法印たちの験力によって、いく分でも苦難を除き、安楽を得ようと期待した心情が推察される。

これらの寺僧や修験者たちが、いつ頃からこの地域に進出し、住みつくようになったのか、その初期の事情を知る資料にとぼしい。しかし、平泉の藤原氏が田束山や金華山および牧山に、一山組織を形成した時を最初の時期としても、12世紀後半のころであり、現在まですでに約800年にわたる歳月を経過しているわけで、この長い年月の間に培われた信仰習俗は、根強い基盤となって村落生活に影響を与え、民間の信仰として残存していると考えられる。

第5章 一山組織と民間信仰

前章でも見たように、一山組織は民間信仰の母体的役割を果たしていた。神仏習合思想の背景には、古来からの神祇信仰があるために、山内には多くの諸神諸仏が奉祀されて、行事・法会が執行され、民衆の信仰を集めてきた。また、一山組織をもつ霊場・霊山は浄域として崇拜、信仰されてきたのである。

第1節 密教と禁忌

霊地や霊山などは四至が結界され、その中には不浄、すなわち穢の入ることが禁じられ、結界点には「女人禁制」とか「女人結界」の碑などが建立される場合も多く、清水や冷水などが湧出し、近くには女人堂、籠り堂などが建てられていた。男性はそこで水垢離をとって、身心を清浄にして登拝し、女性はそこにとどまって入山することは禁止された。

明治の女人結界廃止（解禁）の問題であるが、政府は明治元年3月の神仏判然令に続いて、同5年3月には女人結界廃止の布告を公布した。これらのことは宗教集団や民間からの要望によるものではなく、政治の側からの一方的な令達であった。したがって、それぞれの霊地や霊山などにおいて対応はさまざまであったが、概して修験関係の山々が厳格であった。一山組織の中でも一山鎮守の方は比較的円滑に復飾が行なわれ、女人解禁もスムーズに行なわれた。これに対して一山寺院の方は、解禁をめぐって混乱が長く続いた。

第2節 農耕信仰の展開

本節では、東北の白山信仰の分布と伝播、古代東北地方における農耕神としての葉山（薬師）信仰との関係、福田の語源・行事、ならびに餅との関連などについて考察する。

第3節 山形県の一山組織と民間信仰

本節では、はじめに第2章第2節で述べた宮内の熊野神社と民間信仰、次に第2章第3節で扱った平塩の熊野神社と民間信仰、また第2章第5節で述べた葉山の一山と民間信仰、さらに第2章第6節で述べた鳥海山の一山と民間信仰・民俗芸能との関係について記述している。

第4節 宮城県の一山組織と民間信仰

本節では、はじめに第3章第3節でとりあげた陸奥国分寺の一山と民間信仰、次に第3章第5節で述べた毛越寺の一山と民間信仰、また第3章第2節で述べた麓峰寺の一山と民間信仰との関係について記述した。

第6章 終 論

本章は、すでに述べたことと重複するところもあるが、前章までに考察してきた一山組織の総括をめざしている。

第1節 一山寺院の研究

わが国の密教寺院の典型とされる一山寺院は、平安初期に伝教・弘法両大師が形成した比叡山延暦寺と高野山金剛峰寺が代表的なものである。ともに密教修学の中心道場で、これらの地で修行を積んだ聖職者が、密教弘通のために各地に進出し、東北地方では平安中期頃から一山寺院が建立さ

れる。

このように中央と地方に形成された一山寺院の間には関連性が見られる。東北の一山寺院はそれぞれ独立の別山で殺生禁断の地とされ、一山不俱が原則となっていた。やがて、室町末期から近世初頭にかけて、山内の天台・真言両宗をめぐるの宗派争いが起き、この原則がゆらぎはじめていく。

これらの一山寺院を概観すると、そこには共通の特色が考えられるので、一応の規定（作業仮説的規定）も可能となる。この規定に該当する一山寺院（のちには一山組織）を、組織・構成・主要年中行事・保護者と信者・民間信仰との関係および民俗芸能の伝承などの観点に立って、考察した結果をまとめた。

第2節 一山組織の衆徒と六口供僧

前節で述べたように作業仮説的規定として、「一山組織とは、加持祈祷を主とする密教系の寺院坊一衆徒または社僧（六口供僧）一によって構成され、檀那の除災招福を祈念する祈願寺的性格を有する寺院及び神社である。」と修正した形で本著は成立している。この規定の中で、一山組織の主体の階層は、衆徒または社僧と思われる。この階層に、六口供僧・六か寺・大番組格・六軀、六供といわれる6人を単位とした組織が、一山や法会などを運営していたことがわかる。そして、一山組織の衆徒の総数が6の倍数で、6、12、18、24で構成されていることも重要であると思われる。本節では、この問題を整理する。

第3節 六口供僧と六波羅蜜

前節で述べたように、一山組織の主体であった衆徒や社僧の数は、六口供僧が基準となり、6の倍数になっていたと考えられる。次にこの六口供僧と六波羅蜜との関係を整理しておく。

一山組織の人的構成の主体である衆徒や社僧の数は、六口供僧が基準となり、6または6の倍数になっていたと推定される。しかし、その役務内容が不明であるが、六口供僧とは大乘仏教の菩薩道を行ずる六度、すなわち、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六波羅蜜を表象する六種供養（闕伽・塗香・華鬘・焼香・飲食・燈明）を、神仏に備える役僧だったと思われる。山形県河北町谷地の八幡宮では、古くは社僧（末寺や門徒）、補佐役（社人三家・楽人三家）が、祭日に六種供養を奉納した。谷地八幡宮の朱印地である六供郷（町）には、別当の円福寺をはじめ、配下の門徒2か寺・補佐役（社人三家・楽人三家）、雑務役（門前衆）などが居住していて、八幡宮に奉仕し、現在も六供に住んでいる人びとがいる。

以上、東北の一山組織には、6人を単位とした集団が形成され、その六口供僧の役割は、六種供養を実践していたと考えられる。谷地の八幡宮の例でもわかるように、一山組織と地域とは密接に結びついていたと思われる。

第4節 密教と民間信仰との関係

本節では、密教とくに一山組織と民間信仰との関係をまとめる。

東北地方に一山組織が形成された平安時代から現在まで、約900年以上の歳月を経過しているが、この間、幾多の変遷を重ねながら培われた信仰習俗は、民間の人びとの生活に大きな影響を与えてきたと考えられる。しかし、これらの信仰習俗は、昭和30年以後の高度経済成長を一つの区切りとして、大きく変化しているのが実情である。すなわち密教の加持祈禱的な請願態の信仰体制は、その将来性がどうなるのかが問題となる。

密教の信仰体制は請願態の要素だけではなく、希求態・融合態・諦住態の要素も含まれており、時代の要請に応じて変化しているが、わが国の仏教史の中で密教が民間の信仰習俗の形成に大きな役割を果たし、その母体的な力となってきたことは認めなければならないし、できるだけその関係を明らかにしなければならないと思う。

第7章 附 論

本章では、一山組織の背景をなすものとして、「古志（四）王神信仰」、「オシラ信仰」、「鬼やらい」、「蔵王権現信仰」などの各種の信仰をまとめた。

結 び

平安初期に抬頭した真言・天台の密教は、衆徒や社僧を中心に寺院組織を成立させて、全国に展開していったと考えられる。特に東北では密教・修験道が各地の霊地・霊山信仰を吸収しつつ、山岳寺院を形成し、一山を整備・組織化し、地域民衆の信仰の中心として展開する。こうして組織化された密教寺院（宮社）の一山組織は、それぞれの寺社で成立や歴史的展開に相違点が見られる。東北の一山組織を持つ寺社の多くは、地域的に個別分散して一山を形成しており、「一山不俱」といわれるように、中世には別山・無本寺として、本山の強力な支配を受けることはなかった。そのことがかえって諸山の特色をなす原因となった。

しかし、密教と修験道の思想を軸とする寺社である限り、組織や法会などの内容にある程度の共通点が考えられる。ことに東北の密教的一山組織には、次に述べるような共通する特色が指摘できる。

- (1) 密教・修験道の特色である即身成仏をめざす仏教を基盤として展開されている。すなわち密教・修験道では山中他界観に基づき山を修行道場と考え、特に修験道の入峯修行には十界の修行がとり入れられている。
- (2) 寺社領内は殺生禁断の浄域（霊場・霊山）であった。一山は霊域と考えられ、密教・修験道では殺生禁断が重視されるので、その境内地・寺社領内に入れば、重罪人といえども保護を受けられることのできる、一種の不可侵の場（アジュール）であった。
- (3) 社会的な宗教機能は加持祈禱であった。密教は加持祈禱を通して現世の安心を保証すること

- を重んじ、それによって地域の人びとと密接に結びついていたと考えられる。
- (4) 檀那および帰依信者たちの除災招福（現世利益）を祈念し、そのことは法会・行事を通じて実現され、その裏付けとしての寺領や霞場を有していた。
 - (5) 独自の禁忌（タブー）を有していた。山は霊域と考えられ、入山修行者には別火精進行などが課せられ、明治5年3月の女人結界廃止の布告まで、結界が設定されて女人禁制・産穢・死穢などの禁忌が厳守されていた。
 - (6) 古代から現代に至るまで広い地域にわたって、檀那・帰依信者・氏子などを有している。
 - (7) 組織は一山総（惣）衆であるが、その主体は衆徒または社僧であり、この階層の中に六口供僧と呼ばれる6人を単位とした供僧がおり、一山の法会や行事を運営していた。これは密教の六種供養、すなわち六度（六波羅蜜）の実践を示すものである。
 - (8) 本地垂迹の思想に基づき、明治維新の神仏分離令まで神仏習合が基盤となっていた。
 - (9) 寺社の境内には数多くの諸神・諸仏を祀る堂社（伽藍）が、地形に応じて配置され祀られていた。
 - (10) 民間信仰の母体的な性格を有し、地域社会・民衆の信仰の拠り所となっていた。
 - (11) 延年舞や舞楽・神楽などの民俗芸能を伝承している。

以上の特徴から「一山組織とは、加持祈禱を主とする密教系の寺院坊一衆徒または社僧（六口供僧）によって構成され、檀那の除災招福を祈念する祈願寺的性格を有する寺院および神社である」と規定した。そして東北の一山組織も、すでに述べたように大小さまざまな組織が存在したが、基本的な組織形態を分類すれば、支配職、衆徒・社僧（一山の中核）、補佐役、雑務役（門前衆）の4つの階層に大別されるが、平安中期から明治の神仏分離まで幾多の変遷を重ねながら、東北地方の人々の民間信仰の支えとなり、民俗芸能を伝播・浸透させてきた社会的宗教機能は大きなものであると考えられる。

論文審査結果の要旨

本論文は、東北地方の寺社のうち、「一山不俱」と称して独立性を保持してきた密教系の寺院並びにこれと習合した神社の組織および機能に関する体系的な研究である。この種の研究は従来ほとんど試みられてはおらず、僅かに個別の寺社を対象とした地域史的な視野での研究が断片的にあるのみであり、比較に基づく体系的な研究は本論文をもって嚆矢とする。本論文の鍵概念である「一山組織」は、論者が研究の当初このような寺院の形態的特徴を表すために提唱した「一山寺院」という呼称を、さらに同様の形態を持つ神社をも含めるために拡張したものである。従って、このような形態的特徴の原型は密教系寺院にあり、本論文もまずその諸事例の検討から始められている。

「序論」では、東北地方の一山組織を理解するための前提として、平安時代に端を発した仏教寺

院の密教化と密教寺院の地方への伝播を概説した後で、本論文の視点および方法を述べ、近年急速に学界の注目を集めてきた中世寺院史の研究とも関連させて、地方寺院の歴史の実態の解明の必要性を強調する。その際に従来の研究の多くが政治史あるいは経済史の視点に偏っていた傾向を修正すべきだとし、むしろ靈山信仰や修験道信仰との関連を視野に収めて、寺社の法会・儀礼・行事などをも考慮すべきことを主張する。この観点から論者は歴史的な史料と民俗学的な資料とを結び合わせて、多角的な考察を試みようとするのである。

さて論者は、中世から近世に至るまで一山寺院を主導してきたのは「衆徒」であると見做し、これを中心に高野山、比叡山、金峯山、熊野三山および英彦山における一山組織を略述した後に、それと比較して東北地方の一山組織の共通点を次のように把握する。(1)即身成仏を目指す仏教に基づき、(2)領内を殺生禁制の浄域とし、(3)宗教機能は加持祈祷であり、(4)檀那や帰依者の除災招福祈願の見返りとして寺領や霞場を確保し、(5)独自の禁忌を持ち、(6)歴史的に広い地域に檀那・帰依信者・氏子を有し、(7)一山惣衆の主体は衆徒あるいは社僧で六波羅蜜の実践を象徴する六口供僧が中心となり、(8)本地垂迹思想による神仏習合を基盤とし、(9)境内に多くの神仏を祀り、(10)民間信仰の母体となり、(11)延年舞や舞楽、神楽などの民俗芸能を伝承している。ここから論者は、作業仮説的規定と断りつつ、「一山組織とは、加持祈祷を主とする密教系の寺・院・坊——衆徒または社僧（六口供僧）——によって構成された、檀那の除災招福を祈念する祈願寺的性格を有する寺院および神社である」という定義を導き出し、これを第二章以下五章に分けて、東北地方の具体的事例に即して検証していく。

第二章「山形県の一山組織」では、論者の研究の出発点となった慈恩寺がまず取り上げられ、江戸時代初期の史料に基づき、一山組織が宝蔵院・花蔵院および最上院の支配職、40数ヶ院から成る衆徒、若干の補佐役並びに一部の在家を含む雑務役によって階層構造的に構成されていることが明らかにされ、さらにそれぞれの役職に就く資格や任務などが詳細に述べられている。続いて南陽市宮内の熊野神社にも六供衆と言われる社僧がいたこと、さらに寒河江市平塩の熊野神社や谷地八幡神社にも同様の組織が見られ、寺院のみならず神社もまた一山組織を有していたことが指摘されている。他にこの章には葉山信仰の一拠点であった大円院、鳥海山修験院の一山組織が扱われている。

第三章「宮城県・岩手県の一山組織」は、東北地方では早い時期に一山組織を形成したと見られる宮城県栗原郡勝大寺をはじめ、遠田郡笹峰寺、陸奥国分寺、岩手県中尊寺、毛越寺および天台寺の各一山組織について、歴史的な変遷、組織並びに諸儀礼の特色などを考察している。

第四章「一山組織の諸相」は、前章までに扱われた代表的な一山組織を持つ寺社以外の事例並びに諸種の信仰との結合および年中行事を含む儀礼を、山形県の立石寺、慈恩寺と葉山、蔵王山、勝大寺および金華山の寺社に関して述べている。

第五章「一山組織と民間信仰」では、禁忌習俗との関連で密教系の靈山における女人禁制が、また農耕儀礼との関連で白山信仰および福田行事が各地の事例に即して検討され、そのほかに除災招福に関わる各種の民間信仰との結合例が記述されている。

第六章「終論」は、論者の研究の出発点をなした「一山寺院」の概念を総括した後、一山組織の中心をなし運営の主たる担い手である衆徒および社僧が6人を単位として構成され、「六口供僧」、「六寺」、「六軀」あるいは「六供」といった呼称を持ち、その上衆徒の数も6の倍数をなしている事例が多いことを重要視し、従来全く論じられることのなかったその由来と役割に関して、これを真言密教の事相に求め、大乘菩薩道の六波羅蜜を儀礼的に表象した六種供養（闍伽・塗香・華鬘・焼香・飲食・灯明）を神仏に供える役僧であったと想定している。蓋然性の高い推測であり、今後の研究の指針とされるべきものと考えられる。

以上のように、本論文は東北地方の密教系寺院およびこれと習合した神社の組織・機能に関する多角的・体系的な研究である。これに匹敵する本格的な調査研究は他になく、単に東北地方のみならず、広く我が国の宗教史の研究にも寄与するところが少なくない。現に、論者が提唱した「一山寺院」という術語は専門分野において認められており、一部の事典の項目にも採用されている。また本論文が依拠した史料には、論者が採録した史料も多く含まれており、この点においても本論文は高い価値を持つと言える。反面において、「一山不俱」という表現に窺われるアウトルキーの形態に関しては、宗教的側面に重点が置かれていて、世俗的＝社会・経済的な側面の追求が不足している点は否めないが、これはむしろ今後の課題と言うべきであろう。また民間信仰を論じるに際して、一部に既存の民俗学説を無批判に採り入れている点が認められるが、全体の論旨に影響を与えるほどの問題点ではない。

以上の理由によって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものである。